

フィールドワーク便り

クルアーン学校の生徒として生きる

—ニアメで小さな先生と過ごした日々—

芦田 瑞歩*

首都ニアメでの風景

「アイシャ! キン タヒ マカランタ?」
朝8時40分ごろ、知り合いの女性が道の反対側から、ニジェールでの私の名前「アイシャ」を呼んで「アイシャ、マカランタに行くの?」と声をかけてくれる。マカランタとは、ハウサ語でクルアーン学校のことをさし、このかけ声はクルアーン学校へ通う朝の恒例の出来事だ。

西アフリカに位置するニジェールは、とても暑い国である。私が滞在していたのは雨季であったが、基本的に日中の気温は40℃まで上がる。そんな首都ニアメの滞在する家の敷地から一歩外へ出ると、子どもたちの楽しそうな声が聞こえてくる。家の前でサッカーをしたり、小さな子どもがさらに小さな赤ちゃんを抱っこしていたり、それもそのはず、ニジェールは、女性が一生に産む子どもの数を表す合計特殊出生率がおよそ7.0と世界で出生数の最も多い国である [UNICEF 2021]。通りを歩いていても、市場にいても、とにかく子どもがたくさんいる。

ニアメでの光景にもうひとつ特徴的なこと

がある。それは、クルアーン学校の存在である。国民の95%以上がムスリムであるニジェールには、クルアーンやイスラームの知識を学ぶマカランタがモスクや小・中学校の敷地、市場のなか、住宅街にあり、近くに行くと子どもたちのクルアーンを暗唱する声が聞こえてくる。私は2022年9月、数あるクルアーン学校のうち一校に入学したのだった。

小さいけれど偉大な生徒たち

2023年6月26日、およそ半年ぶりにニアメに帰ってきた。今回の滞在は12月中旬までを予定していた。ニアメに到着した日、電話代とインターネット代をチャージするためのカードを買いに家からほど近い雑貨屋に出かけた帰り、偶然ある人と再会した。昨年の調査時に出会った同じクルアーン学校に通う女子生徒のAちゃん(14歳)である。Aちゃんは中学生でありながら、私にとっては偉大な「先生」であった。

彼女は中学校に通っているために前回の調査時には数回しか会えなかったが、一緒に出席できたときには、アラビア文字の書き方や

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

発音を教えてくれた。フランス語を話せる数少ない生徒でもあり、私の大学院生という立場やクルアーン学校に通う目的を理解して応援してくれた。お互いに再会を喜んでまもなく、Aちゃんが、「マカランタにまた通うよね？タバスキ（イスラームの犠牲祭）休暇が明けた土曜日から授業が始まるよ。また一緒に通おうよ」と言ってくれた。調査を後押ししてくれるこの言葉に、私の居場所ができたような気がして、ほっとした。

クルアーン学校に通う

そもそもクルアーン学校に入学したのは、自ら生徒になることで子どもたちの学びをより深く知りたかったからだ。しかし入学した当初、突然日本からやってきて、ムスリムでもない私がクルアーン学校に入学することは、決して容易ではなかった。

2022年9月21日、クルアーン学校X校（以下、X校）への入学が許可されたその日、そこには、狭い教室に教師ひとりと男女あわせて75人の生徒が大きな声でクルアーンを暗唱していた。この光景に、圧倒され、おじ気づいてしまった。

生徒たちも、また見知らぬ外国人である私を怖がった。そして地域の人々のなかにも、ムスリムではない人がクルアーン学校に通うことに、疑念を抱く人や私のヒジャブ姿を面白がる人も少なくなかった。

緊張と不安を抱いて迎えた初日の9月26日、朝8時50分に授業が開始した。授業が終了したのは11時。始めから終わりまで、クルアーンの暗唱だった。見学した日に見た

光景と同じである。「気づいたら、授業が終わっていた」というのが実感であった。70人の生徒がぎゅうぎゅうづめに座って、暑さに耐えた2時間でもあった。

授業中、多くの生徒が後ろを振りかえって私を見つめ、不思議がり、そして怖がっていた。それでも授業が終わるころ、隣に座っていた女の子が、「授業は終わりだよ。また明日ね」と、にっこりと微笑みながら話しかけてくれた。この女子生徒がまさしくAちゃんだった。彼女のおかげで、ずっと緊張していた気持ちが少しほぐれた。

クルアーン学校X校の授業

X校は教室がひとつのみで、黒板を前にして、中央の柱を境に右側に女子、左側に男子が床に座っていた（写真1）。生徒は、2、3歳から15歳ぐらいまでで、若い生徒が前に座り、年齢が上がるにつれて後方に座る。私は教室右側の最後列のはしに座った。Aちゃんが通学する日は、私の左どなりがAちゃんの定位置だった。その隣には、Aちゃん



写真1 クルアーン学校X校の教室内部

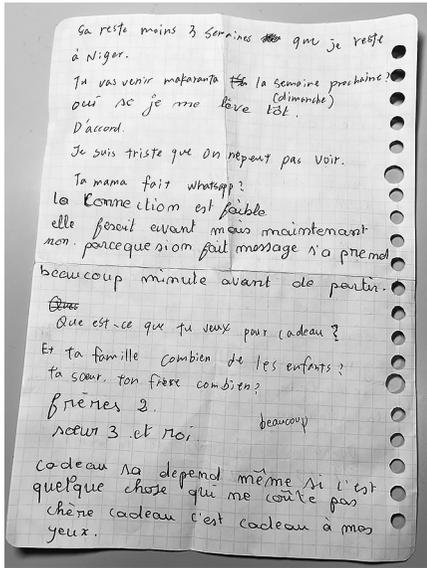


写真4 隣に座っていたAちゃんと文通した紙きれ

文通したりする者もいる。私自身も、小さな先生たちと文通することがあった（写真4）。文通は生徒たちのクルアーン学校での学びや家族、日々の生活について知るための貴重な手段であり、教師に隠れて紙を交換しあった。

そして彼女たちは、授業で扱うアラビア語の読みを教えてくれる。とくにBちゃんは、なかなかクルアーンの暗唱についていけずに生徒の暗唱中に黙ってしまう私に、「読んでみなよ、アイシャ。とりあえず挑戦してみて」と、まるで本当の教師のように激励してくれた。

生徒として認めてもらえた日

ニアメに戻り、X校への通学を再開してから10日間ほど経った2023年7月中旬のある日、この日の授業では教師がいつも増

して生徒が独唱する時間を多くとった。詠ませる章句はクルアーンの第一章「開端」章。教師が指名する人数も多く、いつもはあまり独唱しない7、8歳の生徒も指名した。ついには、座っている順番で指名しはじめたので私は自分にもまわってくることを考えはじめた。

Aちゃんに暗唱する順番がまわってきたので、私は心の中で暗唱部分を復唱した。Aちゃんが暗唱し終わると、教師に「アシダ、詠みなさい」と指名された。私だけでなく、近くに座っていた生徒たちも驚いた顔をしていたが、詠まなければならぬ。私もほかの生徒と同様に独唱した。発音を訂正されて繰り返し詠む部分もあったが、最後まで、なんとか暗唱できた。

暗唱中、近くに座っている小さな先生たちは、私をじっと見つめて微笑みながら応援してくれた。私が暗唱した後、「とてもよかった」とほめてくれた。Aちゃんは、「ミズホのことを誇らしく思うよ」とまで言ってくれた。授業終了後に教師が、「よく暗唱できたね。とても良かったよ。ゆっくり少しずつでいいから覚えていこう」と声をかけてくれた。この瞬間、私はX校の本当の生徒として認められたような気がした。

2023年7月26日の朝、いつものようにX校に通うために準備をしていた。指導教員から突然、「大統領が、軍部に拘束された」というニュースを受け取り、自宅待機となった。クーデターが発生したのだった。この日は授業終了後に、Aちゃんに連れられて服の仕立て屋をしている彼女の父親を訪問する約

束をしていた。午後にはいつもと同じようにアシスタントの家へ行き、女性たちと過ごす予定だった。しかし約束はかなわず、25日にX校へ通学したのを最後に、私は滞在先を離れ、ニアメ市郊外へ避難をし、8月2日にそのまま国外退避となった。いま、小さな先生たちはどのような日々を過ごしているのだろうか。10月現在、クーデターが収束しておらず、ニアメ市の官庁街における暴動やフランス軍の撤退というニュースが入ってくるが、今日もニジュールでは、子どもたちが

クルアーン学校に通いつづけているにちがいない。

いまでは、ニアメはとても遠い存在となってしまった。ニアメで出会い、一緒にクルアーン学校で学んだ子どもたちに思いをはせながら、私は彼らとふたたび一緒に通学して、ひざを並べて一緒にクルアーンを暗唱する平穏な日々がもどることを強く願っている。

引用文献

UNICEF. 2021. 『世界子供白書2021 統計データ』

トルコのマンガ考

—日本のマンガ受容とイスラームの境界線—

藤本 あずさ*

「一番人気のある日本のマンガはどれですか？」私は書店員に尋ねる。

「どれも全部人気ですよ」20代の女性店員が朗らかに答えた。

「そのなかでも最も売れているのはどれですか？」もう一押しする。

彼女はうーん、としばし頭を悩ませこう続けた。

「強いて言うなら『進撃の巨人』、『鬼滅の刃』、『呪術廻戦』が売れ筋ですね。」

ここはトルコ共和国（以下、トルコ）の都市部イスタンブールのアジア側にある、カドゥキョイという街である。一般的にトルコのアジア側は観光客が多く訪れるヨーロッパ側と比べて敬虔な市民が多い。しかしこのカドゥキョイという場所はやや異質である。街を歩けば至る所で洒落た酒場に出くわすからである。そしてスーパーに行けば冷えたビールがずらりと並んでいる。もっとも、これは日本では当たり前の光景である。しかし、世俗主義とはいえ飲酒をハラームとするイス

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科